

飯田モデルにおける社会イノベーション（市民社会）

- ①飯田モデル（市民社会）における社会イノベーションの定義
- ②社会イノベーションに至る社会的受容性と協働ガバナンスの作用
- ③次のステップは何か？現在の飯田モデルをどうすれば突破できるか？

1. 飯田モデル（市民社会）における社会イノベーションの定義

→統一性を持たせるためにシンプルに

ソーシャル・イノベーションとは、「ある地域や組織において構築されている人々の総合関係を、新たな価値観によって確信していく動き」であり、「社会の様々な問題や課題に対して、より良い社会の実現を目指し人々が知識や知恵を出し合い、新たな方法で社会の仕組みを刷新していくこと」（野中・廣瀬・平田、2014）、あるいは「社会的課題の解決に取り組むビジネスを通して、新たな社会的価値を創出し、経済的・社会的成果をもたらす革新」（谷本・大室・大平・土井・吉村、2013）。

後者の定義を踏まえると、飯田市においては、「おひさま進歩」が飯田市で始めた、市民共同発電事業の導入・普及自体がソーシャル・イノベーションであるといえる。

↑

「太陽光発電技術を技術イノベーション、市民共同発電事業の導入・普及を制度イノベーション、FIT の導入を市場イノベーションと位置づけ、これらの動きを後押しする持続的な社会の変化を社会イノベーションと位置付ける」5月13日 TK 会議

2. 社会イノベーションに至る社会的受容性と協働ガバナンスの作用

(1) 社会的受容性：当該社会が新たなもの（イノベーション？）を受入れる条件や程度を意味する→本研究では、イノベーションを促す、より動的な条件として位置づけ

(2) 協働ガバナンス：政策決定プロセス全体を俯瞰した視点からとらえ、プロセスにおけるマルチアクターの参加を重視した概念である（Ansell & Gash、2008）。

結局、協働ガバナンスとは何なのか？

- ① 何を目的とし、何を Govern（統治）するのか？：市民共同発電事業の普及（低炭素化とまで言えない）
- ② アクターは誰なのか？：おひさま進歩を中心に、飯田市、市民、設置業者、中電、地域金融機関等
- ③ どのような枠組みなのか？（様々な理論あり）：飯田では緩やか（枠組みといえるか？）

(3) イノベーションに対する協働ガバナンスと社会的受容性の作用

協働ガバナンスは、その目的達成（課題解決？）のための枠組み。したがって、目的達成のため

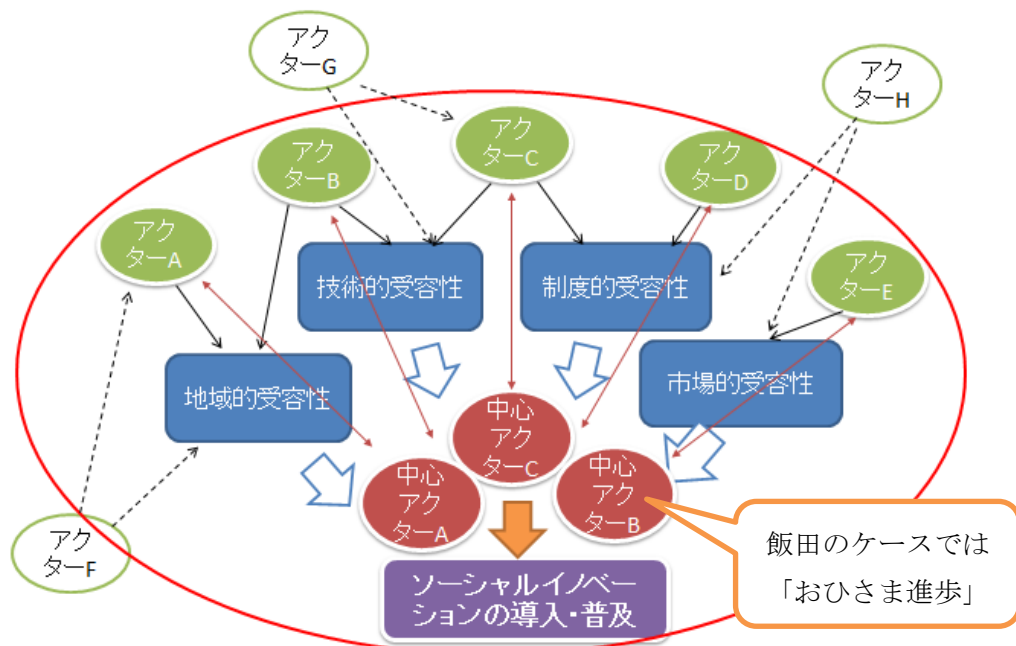
めにイノベーションが必要であれば、イノベーションを促しうるが、協働ガバナンス自体がイノベーションを生み出すマシンではない。世の中には、数多くの協働ガバナンスが存在すると考えられるが、それぞれからイノベーションが生まれているわけではない（と思う）。

↓

協働ガバナンスは、社会的受容性の高まりにより形成される側面と、それ自体が（イノベーションを促す）社会的受容性を高めるメカニズムとして作用するという二つの捉え方がある。後者は、特定課題解決のためのアクターが協働することにより、制度的、市場的、技術的、地域的受容性が高まり、特定課題解決に向けた取り組みが促進されるというメカニズム。その取り組みの中でイノベーションが生まれる（可能性が高まる）。

↓

さらに、イノベーションが生じた後の普及の促進、つまりイノベーターの活動をより円滑にするための環境づくり（社会的受容性の向上）のために、協働ガバナンスはより大きな役割を果たすのではないかと？



地域の協働ガバナンスの枠組み

協働ガバナンスのアクターがイノベーションと社会的受容性を関連付ける

3. 次のステップは何か？現在の飯田モデルをどうすれば突破できるか？

飯田市：イノベーションの範囲のさらなる拡大（アクターの拡大、対象事業の拡大）

→更なる高みを目指すためには、協働ガバナンスの枠組みと課題設定を見直す必要あり（本当にやりたいことは何なのか？主要アクターが協働しうる明確な課題の設定）

他都市：飯田モデルの導入、適用、普及

以上